

<資料紹介>

『靈交』にあとがきを記す。(8)

——香川県大島の療養所をあらわす点描——

「『靈交』にあとがきを記す。」(1)『彦根論叢』第378号(2009年5月)掲載

同(2)『彦根論叢』第379号(同年7月)掲載

同(3)『彦根論叢』第380号(同年9月)掲載

同(4)『滋賀大学経済学部研究年報』第16巻(同年11月)掲載

同(5)『彦根論叢』第384号(2010年夏号6月)掲載

同(6)『彦根論叢』第385号(同年秋号9月)掲載

同(7)『滋賀大学経済学部研究年報』第17巻(同年11月)掲載

阿部 安成

猛筆の穂波 今回ここに紹介する『靈交』は、1937年11月から1938年12月までに発行された号となる(第228号～第241号)。日中戦争の戦時下に長田穂波は、猛筆という造語を使いたくなるほどに、たくさんの稿を『靈交』誌上に寄せるすさまじい筆(彼のばあい実際はペンなのだが)の揮いようをみせた。活版印刷による『靈交』の紙面は、2段組みの8頁立てとなっている。穂波の執筆した稿の表題(太字表示)をその紙面の段数とともにあげよう——1937年発行では、第228号「**聖書の示す処**」(長田穂波、7段)、第229号「**聖誕と瞑想**」(同前、9段)、ついで、1938年発行では、第230号「**ちゝのこゝろ**」(同前、6段)、第231号「**この言は人の光なり**」(同前、10段)、第232号「**所内ラヂオ**」(同前、2段。ラジオ放送の内容か)、第233号「**祈り家の窓より**」(同前、8段)「**心の内に平和を建よ／祈禱と信仰**」(穂波生、4段)、第234号「**かはらぬ友達／恵に任せる生活**」(長田穂波、5段)「**随筆**」(穂波生、5段)「**復活への信仰**」(同前、2段)、第235号「**詩篇二十六篇より**」(長田穂波、5段)「**はたらけ／石頭／随筆**」(穂波生、7段)、第236号

「詩篇第十九篇」（長田穂波、6段）「葬式／席話／残香」（穂波生、2段）「葬式／席話／残花」（同前、3段）、第237号「私は知らない」（同前、4段）「詩篇第一篇」（長田穂波、3段）「随筆」（をさだ・ほなみ、5段）、第238号「端居」（長田穂波、4段）「随筆」（穂波生、4段）、第239号「血の痛み」（長田穂波、4段）「随筆」（穂波坊、3段）、第240号「御名の崇められむことを」（長田穂波、7段）「随筆」（穂波坊、4段）、第241号「鐘が鳴る」（長田穂波、4段）「随筆録」（長田生、5段）、といった寄稿数の多さを穂波はみせた。

おさだほなみ選集 さて、ここで、彼の名の読み方をみよう。すでに別稿にも記したとおり、穂波にとっての「私の頁」であり、かつ「楽しい赤裸の場所だ」と紙上で報せていた『靈交』「編輯後記」（R:231_38）において¹⁾、特大の活字でルビをふって自身の氏名を記した。大きな「長田穂波」の文字に、通常の本文活字の級数くらいのルビが「おさだほなみ」とふられている。ただし彼は、大島ではもはや「ナガタ」でとおっているので、「人間は間違た事でも習慣となると感情や意識までも其方へ曲るものと見えて、『おさだほなみ』と呼ばれると、一寸変な気持がする」とも述べている。読み方の変更を強くもとめたのではないにせよ、「本当」の読み方を「改めて発表」したこのとき、穂波の内面にはなにかの変化があったのかもしれない。

このとき穂波は、国立療養所長島愛生園の医官「内田〔守——引用者による。以下同〕」博士の御心配で、大阪朝日新聞の浜田先生の御尽力を頂いて、『穂波選集』を出版する予定があり、そのための選稿をしていた。過去に出版したたとえば『靈魂は羽ばたく』（光友社、1928年）などについて、「照会して来る人が毎年、非常に多い」というほどに彼の著書は読まれていた。『靈魂は羽ばたく』は、穂波最初の著書で、こののち1940年には日曜世界社から、さらに1975年にはろばのみみ編集部から復刻版が出版されることとなる²⁾。選集刊行は、旧著を読もうとする「人々に喜んで頂ける」だけでなく、「救癩運動の御助と

1) 阿部安成「楽しい赤裸の場所—大島療養所、長田穂波、情緒纏綿」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.135、2010年7月）参照。なお、『靈交』を出典表記するとき紙名、号数、発行年を本文のとおり略記する。

2) 穂波の著書（単行本）については、阿部安成「長田穂波の痕跡—療養所の生のあらし方」（『ハンセン病市民学会年報2008』2009年）参照。

もなれば尚更本懐である」とその意義を穂波自身がとらえていた（「編輯後記」R:230_38）。この刊行物については、「大島発行の単行本」を列挙するなかでも告知され、『歌集藻の花』、次は『俳句邱山集』、次に『評論集癩人文学』である。雑誌では『靈交』、それから『藻汐草』、それから『藻汐短歌』、それから不定期発行の『つばさ』である」とあげたところで、「近く『穂波選集』が発行される予定」と知らされてもいた（「編輯後記」R:232_38）。

大島の文芸あるいは文筆の活動は、仲間あつてのことという思いが穂波にはあつた——「島にも他の療養所と同様、文芸的作品は伸びて行く、永見^[マ]君の如き、土谷勉君の如き、実に文才の^[マ]透である」（「編輯後記」R:230_38）。ここにいう永見裕が、さきにあげられた『癩人文学』（著作集第一集、大島療養所患者慰藉会、1937年）の著者であり、土谷はのちに、手書きてづくりの逐次刊行物『青松』で穂波追悼号を編んだり（1946年）、穂波の稿をもとにした靈交会とその会員についての史書である『癩院創世』（木村武彦、1949年）を刊行したりすることとなる³⁾。穂波はこの選集刊行がよほどうれしかったのか、「この誌が御手下に届く頃は暑くなりませう、或は其頃に大朝の浜田先生御配慮下さつた穂波選集が出版になるかと存じます。是は癩根絶の為に献げたい祈の原稿です」と、くりかえし刊行を告知していた（「編輯後記」R:236_38）。刊行予定が「九月中旬」、「定価金壹円也」と決まったところでは（「編輯後記」R:238_38）、「感謝／願ひ／との出版」（同前）の見出しのもとで、「是は今迄に出版して居りますものゝ中より選び出し、且つ『新稿』も加へたもので、特に一般的なものをと言ふ心組」だと紹介しつつ、

願ひ心は、この出版によりて、自分の神への子心のつとめ、皇国への報恩忠誠の万分の一、特に……国家社会の強敵たる癩根絶の弾丸一発の資を供したいとの祈り、これであり
ります

との刊行動機も示されていた。その翌月には、選集の書名が発表された（ほなみ坊「靈交第二百四拾号」R:239_38）。本文よりいくらか大きい活字で「穂波実相」と一行に記され、つぎに、

³⁾ この土谷は病が治癒して「らい予防法」のもとで社会復帰し、そののちも病友とのつきあいを続け、『青松』には在園中も社会復帰後も多くの稿を寄せている。土谷についてはべつに論じる予定。

これは今回出版になる書名だと言ふ、名附親は浜田先生か西阪先生か知らんが面白い、珍に出来あがつた全体の骨々しさ、そして弱々しさ、その底に押強い心臓が動いて居るとしたら定めし不気味なものであらふ。／その上に表情の全くなくなつたもの、どの頁から何が飛び出すやら！

——この選集の書名が穂波自身の創意によつていないことを示す、おもしろい証言といえる。浜田とは大阪朝日新聞社社員、西阪は編集者にして日曜世界社の経営者でもある。自著の刊行をまえにしていくらか興奮気味なのか、文意がとりにくい。この記事の下段には、『靈魂は羽ばたく』と『靈火は燃ゆる』の旧著にならんで、「新版広告」として「穂波実相」があがっている。「定価壱円」で、発行所は関西 MTL と大阪朝日新聞社会事業団の 2 つとなっている。

選集刊行がようやく実現した。それを伝える記事は、『靈交』第 240 号に掲載された。この号は靈交会とその会員にとって記念すべきときの発行となった。第 240 号という区切りであり、また、同号発行月の 11 月はかつて 1914 年 11 月 10 日に靈交会が創立したその月であり⁴⁾、もう 1 つ、この 1938 年が『靈交』創刊の 1919 年から数えて 20 年、会創立からだと 25 年になるとの記念の年だったのである。「広告」という大きな級数の活字の見出しで、さらに大きい活字で「穂波実相」との書名が示され、その前後に、「長田穂波著」「四六判／百五十頁」「定価七拾錢」「発行所日曜世界社」とみえる。

感想と詩といろいろと選集されてゐます。「祈禱と生活」は最近の感想でありまして、これが（一）と（二）とあります。他は、大島療養所の機関誌「藻汐草」にのせた所内の事柄の詩もあります。／また修養団より発行した「光れ輝け」より数篇ぬいてのせました。／また先年、一粒社より発行した「雲なき空」のこともあり。また「靈魂は羽ばたく」や「みそらの花」の詩ものせました。精々御利用下さいませ。／この出版によりて癩根絶の聖戦に捧げたい祈の外ありません。／愛する祖国浄化の一念、日本民族の血の苦悩を拭ふと言ふ事は決して軽い問題ではない。御加禱の程をねがひ上げます。

⁴⁾ 11 月発行号には三宅清泉により「記念会を迎へて」(R:228_37)、「靈交会創立記念会を迎へて」(R:240_38) といった記事が書かれる。

との紹介文もある。ここにあげている穂波の書誌情報を示すと、『靈魂は羽ばたく』（前掲）、『みそらの花』（光友社、1928年）、『光れ輝け』（修養団、1931年）、『詩集 雲なき空』（一粒社、1935年）、となる。やはり、穂波は、なかなかの著述者だった。『穂波実相』の広告は、その内容の一節とともに次号第241号にも掲載された。

穂波は利かない手にペンをくくりつけて稿を書くものであるとともに、また、読書する療養者でもあった。たとえばさきにみた、園内刊行物を列挙し、自著選集の刊行をあらかじめ告げた「編輯後記」では、読書する「幸福感」を記録していた——「三谷先生訳の『アウグステイニス』を読んで、今回カルヴィンのものを読むと、まんじゆとやうかんとを重ねて喰ふやうである。何れも贈与されたもの、実に感謝に絶えない幸福感で一杯である」（R:232_38）。ここにいう読書は、三谷隆正の『アウグスチヌス』（三省堂、1937年）とみてまちがいない。1937年12月発行の同書について、1938年3月発行の『靈交』にその感想を記したのだから、速い読書といえる。靈交会教会堂図書室に残る同書には、穂波の赤ペンによる傍線と傍点がたくさん記してある。彼の読書の痕跡である。

会務と印刷 『靈交』第229号（1937年）の「編輯後記」には、意外な記事がふくまれている。署名はないが執筆者は穂波である。

編輯子も第式百参拾号より交代して貰ひ度い希望を有してゐますが、後任者難らしいのであります。余り形に這入り過し感が致しますが、御辛棒下さいまして、御見捨なく御愛読を願上ます。個人雑誌ならぬ責任上、斯く御願申上る訳であります。——「つらひ編輯の任を止さうかと何度思つたかしのれない」とも明かしていた（「編輯後記」R:233_38）。創刊以来、おそらく一貫して、『靈交』の編集は穂波が担ってきた。しかも彼にとって靈交会機関紙『靈交』は、

何とか言ひながら後、四号即ち十一月号で満二十ヶ年の間、編輯に従事して来ました…全部感謝のみ……であります。幸ひにして、其間は身体も守られて、只の一ヶ月も休む事なく奉仕させて頂けたと言ふことであります／これは私の墓でありまして又、私自身の赤裸な屍そのものでせう！。

と、さきの記事が載った「編輯後記」の号からそう経ないところで、「私の墓」「私自身の

赤裸な屍」ともあらわされるほどの大切な交流の場所でもあったのだから (R:236_38)、編輯子交代の希望は唐突にして、意外な、異様な事態をうかがわせる小事件といえる。

翌々月発行の『靈交』第 238 号には、そのつど会計係によって記される誌代や寄附の「報告欄」に続いて、穂波生の「附記」が寄せられ、それはさきの小事件の一斑を推察させる内容となっている。「この際、一寸、靈交会事務に付きまして申上げて置き度いと存じます」始まる文章は、靈交会における事務分担を明示して、靈交会と穂波との「混同はハツキリ区別して頂き度いと存じます」との告知となっていた。「靈交誌も個人のものでなく、会の事業の一つでございます」というのだから、このころ、穂波による靈交会とその機関紙の占用を指摘したり指弾したりするようになにかがあったのだろう。そうした事態への穂波からの応答が、さきにみた編輯子交代の希望であり、この「附記」だったのではないか。

しかもこのとき、『靈交』紙面に印刷の不備があった。現在靈交会に残る機関紙のうち、「自昭和拾参年四月／至昭和拾五年参月／靈交」と墨書された表紙のついた綴にある同紙第 235 号は、1 頁の上段欄外に「靈交」の文字がなく (8 頁も)、同頁右側欄外には発行年月日の印刷が脱落して、それぞれにペンによる手書きで記入されている。また、1 頁と 8 頁の上段欄外の号数表示も第 235 号ではなく、「第貳百参拾四号」となっている。

この誤植について次号「編輯後記」(R:256_38)の冒頭で、「印刷落字の為め骨折つて醜くなつてイササカ腹が立つやら、読者に対する責任感やらで、久し振りに石頭を悩まし」と穂波は憤慨している。この失態をただちに転じて、この号から、「自治会とその作業部の御蔭」で「所内にて印刷の御世話に成る事」となると、一方で穂波はよろこんでいる。靈交会機関紙『靈交』は、1938年7月10日発行の第 236 号から、紙面レイアウトに大きな変更はないものの、題字がかわり、活字がかわり、その級数もかわり、全体の印象がかわった。第 234 号の奥付に見える印刷所は、高松市福田町 20 番地の大賀堂印刷所。第 235 号のそれは、高松市天神前 226 の「秀社英」とある、これも誤植だろう。そして、第 236 号では、香川県木田郡庵治村の大島印刷所となった。

自前の印刷はよろこびだけでなく、便利をももたらした。急な入稿もだいじょうぶということで、「編輯子ものんびりして居ります」との安堵も記されている(「編輯後記」同前)。

三宅清泉も「かげの働き」と題した稿を寄せ、大島で印刷できるよろこびにくわえて、印刷の現場をみたうで、「彼の緻密な仕事に実に係の方の労苦を思ひ、此の暑いとき心身共に疲を覚えられることと存じます。然し印刷は蔭の仕事ではあるが、尊い働であると思ひます」と、作業をするものへの^{ねぎら}労いもみせていた (R:238_38)。

無教会主義 連載の前回にとりあげた『靈交』第 227 号 (1937 年) には、「再度／矢内原忠雄先生を迎ふ」(ほなみ生) が掲載され、第 232 号には、穂波生による「藤井武全集発行について」が載り、第 234 号にも藤井武全集についての記事がみえる。大島の靈交会は、内村鑑三に始まる系譜につらなる人びととの交流があった。矢内原の来島や藤井の全集刊行との関連は不明ながらも、この時期の『靈交』には無教会主義への批判がみられる。たとえば、穂波生「宣言」(R:229_38) では、「無教会主義 (字のまゝに) と言ふ事のキリスト教の性質内にあるべくも非ずと信ず」と記したうで、あらためて、「靈交会はキリスト教を会長に押し頂き、聖書を会則となし、聖霊の御導くまゝに自発的に会務を行ふて来りしは感謝である」と会の原理を掲げていた。

同紙第 235 号 (1938 年) の穂波生「はたらけ」でも、

内村鑑三先生の一派とでも仮に申すか、あの人々は一人々々が懸命ですね……お医者さんでも学校の教師でも、百姓でも会社員でも、アンヤさんでも全生活を賭けて福音を述べ信仰の善働きをせられてゐます。私は大いに敬意を有してゐます。／然し、私は貴方に無教会主義者たれ等とは断じて申ません。無鉄砲にそんな事でもしやうものなら、信仰もキリストも失ふでせうから

というぐあい、靈交会のというよりも、おそらく穂波の主張を展開していた。穂波の精神や思想を理解するためには、矢内原たちとの交流と非無教会主義とについての考察が必要となる。

穂波の日本と血 穂波の精神や思想——冒頭に記したとおり穂波の猛筆は、キリスト教の教えへの理解、それへの信仰をなによりあらわしていたのだが、それとともに、この時

期の穂波は熱心に時局を論じるようになる⁵⁾。

たとえば、「聖書の示す処」(R:228_37)は、原始時代から近代にいたるまでの民族と国家の議論である。「大日本帝国は天意の上に建ち、御皇室に対する国民の観念は形而上的である、『日本は神の国』とさえ言ふ程にある」との日本のもとで、穂波は、「常に神の聖者を奉じて忠実に祖国浄化の為に、『福音的奉公』を怠つてはならない」「祖国日本の永遠の運命の開拓者として、聖戦の駒を進むべきである」と説く。「強国日本、一等国日本、東洋の盟主として祖国を愛します。それだけ広い襟度と、高い理想と深い信念とを、主張せざるを得ません。此処に編輯子の熱禱があります」との祖国愛と熱禱をみせる(「編輯後記」R:229_37)。

穂波の国家論は、神国論、皇国論、国体論へと展開し、そのなかで祖国愛を、日本愛を闡明にしてゆく。そうした議論の1つの典型が、「日本よい国」(R:233_38)である。

自分が予てより愛国を唱へると『穂波は療養所と言ふ皇恩の中に特に浴してゐる故に』と考えるむきも尠なくなかつた。愛国運動に参加すると信仰の友より非難されたものである、しかし自分は黙々と祈りつゝ前進を止めないである、自分の信ずるキリストの血は愛国の祈にわきたつて来るのである。日本をして永遠の光栄の道に於て輝かん事を希ふて！

というぐあいだ。ただし、こうした穂波の主張を狭隘なナショナルな心情の発出だと、かんたんにかたづけるわけにはゆかない。

国のために戈を取るとも、人類愛を失ふてはならない、人類愛のなき民族は多民族の指導者たり得ないのである。日本を愛する心に二ツある、一は日本を狭く閉込めて守る結果に導くもの、一ツは日本をして更に高く広く指導者としておほしたつるものである。

我らは後者の如く祈るものである……。〔をさだ・ほなみ「随筆」R:237_38〕

を読めば、「指導者」の語が気にかかるものの、理念としての「人類愛」を放棄していないのだから、普遍性への回路をまったく鎖してはいない証としてみることができよう。

⁵⁾ 穂波による時局をめぐる議論について1940年代を軸に考察したことがある(阿部安成「癩と時局と書きものを―香川県大島の療養所での1940年代を軸とする」黒川みどり編『近代日本の「他者」と向き合う』解放出版社、部落解放・人権研究所、2010年)。

他方で穂波は、「血」という語とイメージによって、先天性、自然性、生まれながらのつながりや拠りどころを喚起し、それを癩=ハンセン病の「根絶」へとつないでゆく。

日本全体の血のため／いま健康な血の人々のため／癩を根絶しやうではないか／決して小さい問題でないでないか……。〔「セ、ラギ」 R:239_38〕

この血のレトリックが活用された巻頭言が載った号にはまた、「血の痛み」と題された穂波の稿がある。

癩根絶問題は如何に大なる血の痛みであらふ。これは現在の病者と其血族の上のみの問題ではない……血潔を誇る家庭のため……国家民族のため……全人類のため非常に急を要する、重大問題であるまいか……。〔中略〕自分の所有する聖書は、人間の一人々々を、民族は一民族一民族の、国家は其の一つ一つを、社会も何も彼も凡ての血マミレ姿と、その血の痛みとに喰ひ入つて、実相をアバカズにはをかかない熱心が備はつてゐるのである。

と、まるで唯血論とでもいうべき議論が展開されている。時局を血でなぞるようにペンを走らせる穂波も、戦時下の療養所の環境悪化を指弾するときに、自分たち入園者の泣きどころと、いわゆる「外の社会」への攻撃点とに「血」のレトリックを用いてもいる。「療養所増設」予算は、「少しばかりの費用でないか、戦争を一時間やすめば余る程の金子でないか」と見積もったうえで、それを「出し惜しみ」というのなら、「日本人の血を腐らすが良い」と、穂波は「一寸フテクサレ」てみせた。彼にとっては、療養所増設は「病者のため」ではなく「健康者のため」にほかならない。そうならばこそ、「新時代の療養所」「救癩事業」は「病者本意か予防本意か」と問われれば、「この両方を兼ねるとしても、伝染病としては根本を予防本意とせずばなるまい」と記しうるのである。

体調と肉体 これまでにも注目してきたとおり、穂波はしばしば自己の観察ないし診断をおこない、それを記録している。

ペンを執て居れば忘れてゐるが、ペンを捨てると、又、脳がズキズキと痛み出して来る、鉢巻でも締てやりませう。／病人の事で母夜寝不足してゐるので、たゞさえ頭痛が甚だ盛んで、心がスツキリとせないから、出来栄えが案じられる。〔「編輯後記」 R:230_38〕

いま一つ、自分の広告をいたします。御訪問下さる方の多くが『自愛して長生せよ』と仰せらるる御親愛にホロリと致します。何分肉体がヘンテコになつて終つて、定めし一見して倒れさうに御感じにならるるのであらふと思ひます／○我れながら、崩れ行く肉体には愛憎が尽る程です、追々と動き難くなつて来ます、然し内なるものは反比例的に益々若く勇んで来る、其処で心と口とが手足の動きと釣合なくなつてジレツタイ限りであります。〔「編輯後記」 R:231_38〕

——痛む「脳」、「崩れ行く肉体」との自覚である。このころは、くわえて「一銭銅貨に近い大きさの火傷を右手に出かして終つて不自由をする」（「編輯後記」 R:232_38）、「病床三十余年となると、潮の満ち来る如くに何時頃よりともなく、足から手から顔から脳から耳から目から痔までに及んで来た、完全な処は一つも無くなつた」（R:235_38）。けれども、穂波は悲観しない。前者では、「入浴が出来ない熊の手の如く、黒くなつたのが面白い、黒く不自由でも私は非常に愛する、決して脱落すれば良い等とは考えない」し、後者でもこの全患ともいふべき様相を、「面白いものだと思ふ」とみる。穂波は肉体をつねに注視し、それを感じ、そこから自己の生を立て直そうとしていたとみえるのだが、他方でこのころには、「人間は肉体を離れて生き得る」ことを思はざるを得なくなつた」（同前）と、肉体を離れた生を想像するようになった。穂波の身体観、いや、身体感か——これは穂波理解の重要な論点になるとおもう。

【資料】

会計係「報告欄」『靈交』第228号、1937年11月10日

「一、金壱円也、広島、中山悟様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金壱円也、当所、奥村竹一様／右、有難く頂きました／附記=森田誠一師よりと、中山松姉よりの送物は穂波が用ひさして頂きます」

* 「編輯後記」同前

「○非常時の現今、孤島の病床に在る身にも純真な愛国の祈りは湧き止みません、それだけ真剣に考えざるを得ないである、今号は聖書に示さるゝ処、研究いたしました、読者諸

君の御批評が仰ぎたいと存じます。／○北支上海に出征して第一線の将兵の御苦勞を思ひ、戦争を憎み、一日も早く平和に帰らむ事を祈らざるを得ない。が、物価騰貴の不景気に生活戦線の苦を乗り越し乗り越えて、国防献金に銃後のつとめに、耐え忍ぶ同胞の上に涙の合掌を禁じ得ない。／○戦争は憎む、然し全人類の近況を思ふと……………もすこし烈しい福音戦が必要だ……………聖戦の必要を痛感するのである。赤色の代表する神への反逆の大群**サタン**と真に流血の戦だ、全人類の平和のために！、この戦に十字架を負ひて勝たねばならぬ、勝たねば剣の戦は憎むともやめられないではないか？／○福音の戦場に血を流す将兵が尠く弱いから、全世界よりスペインの如き北支の如き惨禍がやまらないのである、責任は神の選民の上にある事を知らねばならない、この責任を痛感して立たなくて、『報国』の誠を何を以てか実行すべきぞ、と思ふ／○療養所に於ても、**ラチオ**によりて戦争気分が作られて居るのみでなく、郷里の縁者等の出征に大なる衝動を受けてゐる。更に直接としては慰問者の絶えた事と、物価騰貴の為に生活費の苦境へ迫りつゝある事であつて、当局者の苦心の程が思ひやられるのである。非常時色は日に年に深まつてゐる。／○然し、今こそ我らの残されし使命に立ちあがつて、祖国のために祈らざるを得ない、祈りの総動員の時であると思ふ。世界平和への見えざる捨石として勇奮せねばならない、日頃の国恩に応えねばならないと思ふ！／○最近耳にした処^(マニラ)によれば、反宗教ソ聯露西亜の国内に婦人子供を重に信仰の目覚しく伸び行く事を！、教会生活を守つてゐない人すら、自ら進んで『無神論者』であるとは言はず、質問欄に『信者』と記してゐるとは、彼の国の新聞の示す処なりとて、レニン未亡人が『教会の偉大なる感化力を**ソブエイト**の学校の青年訓練と同様に、実践的觀念形態を与へんことを切望す』と言ふ論文の発表に一大センセーションを起してゐると、驚くべき報知ではあるまいか？／○世は深思黙考すべき秋冷の候である。人間が奥底の生命の声と、それに応ずる自然の奥の光りに触れる時、理屈のみで解けない、見えざる神の存在にふれるであらふ。科学の力で動いてゐない生命の神秘的な力を感じるであらふし、『何が真理か』と言ふことも考えられるであらふ！／○いざ、聖戦の駒の頭を揃へて『精神奉公』だ、『福音報国』に十字架を負ひて勇進して、大日本帝国の大使命『神の義』の光栄を全く致しませう。御幸福を祈る！」

会計係「報告欄」『靈交』第229号、1937年12月10日

「一、金壱円也、広島、中上悟様、一、金参円也、姫路、芳賀留之助様、一、金弍円也、愛媛、平尾権之助様、一、金五円也、香川、永井千代子様、足立和江様、一、金六拾銭也、朽木、松村雪江様／右、御礼申上ます（大阪の北村老に御礼申上ます……穂波）」

***「編輯後記」同前**

「◇くりすます御芽出度う存じます。御家庭に、靈と真を以て、平和に心静かに御祝ひなさいませう。現代の世界は表面は武張ていますが、人心の奥には平和を何程、こひねがつてゐる事でありませう。靈より靈へ、平和の君の生まれましを伝へませう。／◇主よ、来り給へと祈ります。我が希ひは、肉を離れて神に帰らん事であります。／また、毎日その覚悟で過して居ります。キリスト者には誕生より誕生へでありますまいか……然し、キリストよ、現こそ来り給へ、汝の外に地上に平和をもたらす救主はなし、アーメン／○強国日本、一等国日本、東洋の盟主として祖国を愛します。それだけ広い襟度と、高い理想と深い信念とを、主張せざるを得ません。此処に編輯子の熱禱があります。／◇真理には中立はない！、『宣言』は我が信ずる処の告白である、元より細大もれなく論ずる紙巾がない、要するに大切な根本問題を一言したに過ぬ。然し、大略お察しを頂けると思ふのである。責任は穂波個人に在ることを言明して置く、御教示をも乞ふ！／◇祖国浄化のために『平信徒の奮起』を希望する。自給伝道の盛ならん事を祈る、日本の救ひは日本人にて！、を主張して止ないものである。日本人の深さを以てキリストの真価を掘り出さねばならぬのである。／◇信仰の為に労する事をいとうな……肉の生活の為に尽す時間と労力と物質とに対して、何程を神の為に同胞のために自ら尽しつゝありや、福音の為に何程の血と汗を注いで燃しつゝありや、靈火は暗い、『聖誕と瞑想』の日本人の宗教を読み返して隣人をながめて貰ひ度い。／◇大島リスマスのために御加禱下さい。十七、八日に祝会がありませう。然し、二十五日には更に親睦会を開いて、SS生の父兄とか其他の方も招待して、キリストによる清悦の風気に身と靈とを包まれし一夜を作り度いと祈つてゐます／◇靈交誌にすこしづゝ残部を見込んで刷つてゐます、御入用の方は御使用下さい／◇編輯子も第弍百参拾号より交代して貰ひ度い希望を有してゐますが、後任者難らしいのであ

ります。余り形に這入り過し感が致しますが、御辛棒下さいまして、御見捨なく御愛読を願上ます。個人雑誌ならぬ責任上、斯く御願申上る訳であります。／◇今月は編輯を急ぎましたので、天沼尊哲兄の玉稿を頂きましたが、残念ながら来月に愛割いたさざるを得なくなりました、筆者にも読者にも御詫び申上ます／◇デハ昭和十二年も今号で終りであります。／新年にはペンを祈り潔めて、新しき御導を頂き、御目にかゝりたいと存じます／希ば各位の上に神の御恵み豊かに年を送り、年を迎えられますやう／お祈りいたしつゝ、擱筆いたします、以上」

会計係「報告欄」『靈交』第230号、1938年1月10日

「一、金壱円也、広島、中上悟様／一、金壱円也、豊中、聖光会様／右、頂きました」

*「編輯後記」同前

「□新年の神慶申上ます。特に皇国の華と散らした勇士の御遺族に御挨拶申上ます、更に散り得ずして御負傷の将兵に対して、安きを伺ひ上げ度いと存じます／□福音の将兵勇士各位に御挨拶申上ます。層一層に御奮戦下さらん事を願ひ申上げます。実に人類の靈界の超非常時で御座りまして、今にして勝利の杖を伸べて膺懲せざれば、サタンは赤色の鬼となつて唯物的に何処までも進出して来つゝあります。／□大島の最近は、感謝多きものであります。MTLの全国大会あり、癩学会あり、修養団支部記念大会あり、防空演習あり、訪問客は櫛の歯を引くが如くでした、是ら各位に感謝すると共に、内には引続きで多忙な御配慮と御尽力下さいました、所長様初め所員御一同に厚く感謝いたします／□修養団支部七周年記念大会には岡山、高知等の同志老百名、蓮沼主幹、竹内講師、等の御参集を得、且、大阪住友の小倉様、東京の森村男爵、岡山の鵜飼宗平氏、其他多くの贈物を頂きました。別して松平宮内大臣閣下より金一封御下賜になりました事は、昨年六周年記念に当り、湯浅内大臣閣下より金一封御下賜を頂しと同様に、病者一同は感激感謝でありました。／□朝帆先生が、下駄はいた義足干しあり菊枯るゝ、と吟じられた事を思ひ出して、庭前の二鉢ばかりの菊の老姿を見てみると、初めての雪片が颯々たる嵐につれて舞ひ下つて来た。ペンを執て居れば忘れてゐるが、ペンを捨ると、又、脳がズキズキと痛み出して来る、鉢巻でも締てやりませう。／□長島の内田博士の御心配で、大阪朝日新聞の浜田先

生の御尽力を頂いて、『穂波選集』を出版して頂ける事に話がついたので嬉しい、拙著でも要求して下さる人が沢山あり、殊に、『靈魂は羽ばたく』などは照会して来る人が毎年、非常に多いので、これらの人々に喜んで頂けるし、救癩運動の御助ともなれば尚更本懐である。一日も早く選稿して、出版して頂き度いと祈つてゐる。／□一枚のハガキを書くにも、何かの御奉公にもと念じ、特に逆境に泣く人の涙を拭ひ、悪魔の力をそいで、神の光明を地の上にと希ふ心よりの働が積り積つて、散るだけ散り失せ、残りのペンの跡が意外に沢山ある。しかし、幾らあつても『祖国への感謝』と『神に活かさるゝ喜悅の証言』との二つに帰着するやうである。斯の二つの体験より湧くものを以て、この新しい年も何か御奉公のために活かして頂くのみである。／□大島にも他の療養所と同様、文芸的作品は伸びて行く、永見^[ママ] 祐君の如き、土谷勉君の如き、実に文才の透である。しかし自分は詩人と呼ばれてゐても甚だ文芸にはウトク、少しも其点に於て自信が持てないが、何か御奉公のため、活して頂き度いものである。この一心だけが取処だと自分で思つてゐる訳である。／□さあ……………新年号もこれで生れた訳であるが、病人の事で母夜寝不足してゐるので、たゞさえ頭痛が甚だ盛んで、心がスツキリとせないから、出来栄えが案じられる。何卒、御辛棒して御愛読を願ひます。／皆さま御芽出度ふ、更に前進いたませう。」

会計係「報告欄」『靈交』第231号、1938年2月10日

「一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様、一、金参円也、愛媛、橋新様、一、金五円也、岡山、田中文男様、一、金壹円也、香川、坂本皆之助様、一、金壹円也、高松、植田テル様、一、金壹円也、奈良、大館利男様、一、金壹円也、東京、松本タマ様、一、金壹円也、広島、中上悟様、一、金貳円也、大阪、広瀬治様、一、金参円也、京都、大森幸代様、一、金五円貳拾一銭也、香川、善通寺町日本基督教会様、一、金五円也、神戸、日本イエスキリスト神戸教会様、一、金六拾銭也、京都、樋口光義様、一、金貳円也、東京、宇津木勢八様、一、金壹円也、京都、村上幸太郎様、一、金貳円也、京都、日本メソヂスト伏見教会様、一、金貳円也、広島、原友安様、一、金四円也、東京、横山尚代様、一、金壹円也、三浦信一様、一、金壹円也、朝鮮、高瀬時助様、一、金五円也、愛媛、安井富士三様、一、金貳円也、京都、伊賀貞子様、一、金五円也、高松、三番町日本基督教会様、一、金参円

也、兵庫、名和金次郎様、一、金七拾錢也、愛媛、松岡貞蔵様／右、御礼申上ます。尚ほクリスマス祝会のために御送物として沢山に頂き、御蔭にて十六日はもとより、二十五日夜も、日曜学校生徒父兄を招き、其に楽しき時間を保ち得ました事は、病童と共に私共の大感謝で御座りました。ここに加えて厚く御礼申上ます。」

*** 「編輯後記」 同前**

「○編輯子の姓名……ながた……おさだ……何方に読むか？、こうした疑問の方が大分沢山におありの御様子ゆえに、何だか自己広告のやうで妙に感じますが、誌上発表を御求めの方もありますので、左に改めて発表^{いたします}。／^{おさだほなみ}長田穂波／斯く読むのが本当であります、何卒御加禱下さいませ。／○姓名の序にお話させて頂きませんが、名札は通じさえすれば本尊こそ大切と存じ、大島でも『おさだ』と呼ぶ人はありません。ナガタよ、と通つて居る訳であります。／○穂波、これは『スイハ』と読んでみました処、その読名では国語上より高貴の前や、目上の前に失礼になる事があると知りましたので、国語の如く『ほなみ』と改めました、此方は直にホナミと呼びなされました。／○人間は間違た事でも習慣となると、感情や意識までも其方へ曲るものと見えて、『おさだほなみ』と呼ばれると一寸変な気持がする。間違た習慣か本当を曲げてゐる、斯る事は尠くない事でせう！／○いま一つ、自分の広告をいたします。御訪問下さる方の多くが『自愛して長生せよ』と仰せらるる御親愛にホロリと致します。何分肉体がヘンテコになつて終つて、定めし一見して倒れさうに御感じにならるのであらふと思ひます／○我れながら、崩れ行く肉体には愛憎が尽る程です、追々と動き難くなつて来ます、然し内なるものは反比例的に益々若く勇んで来る、其処で心と口とが手足の動きと釣合なくなつてジレツタイ限りであります。／○其処でなるべく引籠り加減に居り度いと思つてはゐますが、何時の間にやら、又しても、飛び出して口やかましい存在となつてゐる、オセツカイも一種の病気でせうか？／○夕暮より夜にかけて、寒波が猛威をたくましくして迫り来る。一日原稿を記したり、読書研究すると、夕焼雲が薄紅にキラキラ照りて、祈の鐘の告げる頃には、目も手も体も疲労しきつて、ヤレヤレと思ひます。／○今冬は、軽くて温いジャンパーを送つて頂きましたので、肩の凝りが大いに助りますので、床に入りての苦痛が減じられて、朝は気持よく起き上れ

ます、有難い活かされであると悦んで居ります。／○これで二月号も生まれましたが、今日は正月十二日とて、書初のもりで勢ついで居ります。天沼兄が重症室に臥せつてゐられるので、原稿が貰へず、祈つて導かるる儘に記しました……祈の賜……と感謝で贈ります。／○新年は霊交会の礼拝には、血の祈で語り度い決心を与えられてゐます、或は兄姉達を怒らして終つて、会より追ひ出されるかも知れません。然し、病者生活の糧として又、死後の役に立たぬやうな話はせない考です。／○現今の日本には、真に靈魂永生の神音が必要であつて、是を禍てば大変な危険がともなふ憂ひがあります。目下の祖国は、時局の流に浮ひて騒然として居りますが、この一般の沈着をハツキリと致して置く事こそ、**キリスト**者の義務でありませう。／○陣痛は余りに偉大であります。この莫大な犠牲を払つて、生み出すものは何でせうか？、唯物赤色と戦つたのに何の為めでせうか？、民族を超越しての行進は何処でせうか？『神の国』建設の外でありますまい、神によれる平和の外でありますまい！／○孤島病床の私共は、斯の理想実現の為に、熱祈熱禱して止みません。よしこのまま朽ち倒をるとも、神の国の生ぶ声を世界の上に聞くならば、満足して眠むる事が出来ると存じます。／○或る方面には、景気よくありませうが、多くの地方には不景気な風が吹き荒れて居りませう、然し永遠の平和を目指して、この理想に耐えて更に大なる苦難にも耐えんと覚悟してゐるのでありませう。／○この大理想こそ、イエス・**キリスト**の理想であり、福音である。幾千年の主張であり、且つ十字架の上に血を流して建て上げた基礎である。聖戦は布告され、幾多の殉教の血は叫んでゐるのである。今、時變の効果をサタンに与えてはならぬでありませんか。各位の御奮闘を祈ります、以上」

*** 「報告欄」『靈交』第 232 号、1938 年 3 月 10 日**

「一、金参円也、安中、内田久治様／一、金貳円也、広島、中上悟様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金壹円也、愛媛、橘新様／一、金壹円也、島根、大東教会様／一、金壹円也、高松、高橋七五三様／一、金壹円也、広島、中上悟様／以上／右、厚く御礼申上ます……………皆様の愛と祈との贈物に対して、嚴重取扱ひ致しては居りますが、原稿に書き落し等あつて失礼いたす事が御座ゐます、悪からず、且つ一応（御不思の節は）御照会下さりますやう、御願ひ申上ます。」

* 「編輯後記」 同前

「○大嵐がつづいて渡海船が二、三日見えなかつた、二日か三日か目に過ぎないが、大島丸の笛の音を聞くと、心うれしい思ひがする。幸ひ今月は（二月）七日に戸塚運平師を久し振りに御迎え出来て嬉しかつた。翌八日にはエリクソン師を迎え、十六日には大阪の広瀬老兄を迎えたが、何れも波も風もおだやかで実に恵まれた。／○今年は、一銭銅貨に近い大きさの火傷を右手に出かして終つて不自由をする。入浴が出来ない熊の手の如く、黒くなつたのが面白い、黒く不自由でも私は非常に愛する、決して脱落すれば良い等とは考へない。此処に癩病の罪人なる私に対する神の愛をジツと注視する。／○ラヂ訳の聖書を読む、甚だ教へらるる処がある。カルブインの予定論を研究する。これは私の霊が躍つて、歡喜するのを覚ゆる。神は絶対に義しいと私も確信してゐる。信仰は決して自由でない、神に於ては確定したものである。有難いことだ！／○三谷先生訳の『アウグステイニス』を読んで、今回カルヴインのものを読むと、まんじゆとやうかんとを重ねて喰ふやうである。何れも贈与されたもの、実に感謝に絶えない幸福感で一杯である。／○さあ今号も生れた。広瀬老兄のお話を中心として置いた、味深く思ふものである。所内ラヂオは、大島と時局、斯ふした点を御察し頂けると信ずる。三宅老兄の昇天者記念も、確に療養所を打診する一参考と思ふし、藤井武全集についても、紹介し得る事をば喜ぶものである。／○戦地に出征してゐるクリスチャンが皆々大いに神の栄光を現して、立派に軍務を果しつつある事を承つて喜ばしい。如何なる場合にも、『神のものは神に、カイザルのものは正しくカイザルに』の実を行ふてゐる事が善いのではないか。／元より愛国心及誠忠行為は、出征にのみ限り度くなし又、限られないものである！／○一日も早く『平和来』を祈つて止まない、然し直く又、戦乱の街と化す平和でなく、希ば『永久に信和を深め行く神の平和』をこそ祈るものである。或は斯る平和は、**キリスト**の再臨の日迄ないのかも知れない、地上はデマに驚き、大戦船を造ると言ふ国さえある程だから……………然し、失望はせん、神の勝利を信じぬく故に、勇ましく祈るものである。／○大島発行の単行本では、『歌集藻の花』、次は『俳句邱山集』、次に『評論集癩人文学』である。雑誌では『靈交』、それから『藻汐草』、それから『藻汐短歌』、それから不定期発行の『つばさ』である。近く『穂波選集』

が発行される予定。各々特色を有してゐる。／○寒さも彼岸まで、今に島唄ひ花薫り、霞棚引く春と成りませう。いよいよ聖戦の駒は勇むでありませう、各位の御精進を祈ります。」

会計三宅生「報告欄」『靈交』第233号、1938年4月10日

「一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金壹円也、備中、高戸献様／一、金壹円也、群馬、草津二葉寮様／一、金壹円也、近江、酒井知与様／一、金五十銭也、三豊、田中様、以上／右、御礼申上ます」

***「編輯後記」同前**

「●本誌三月号の六頁二行の毎年三十万とあるは、百三十万の誤につき訂正します。何卒、『百』の字を御記入下さい、或は訂正もれもと存じ、改めて御願ひ申上ます。／●何処となく春めいて参りました、然し、各地とも悪性感冒が流行との噂を承りますが、皆様いかゞで御座りますか、御伺ひ申上ます。大島は、普通の風邪は大方が引き込みますが、決して悪性ではありません、御放念下さいませ。／●三月号は大変に恵まれ、皆様にも大いに喜んで頂けました事と信じて居ます。今月号は、イキスターで御復活によれる永遠の御約束と光業の姿とを仰ぎつゞ、予ての信仰を記して見ました。御教示を御願ひします。／●路傍の名もなき小草の一本、踏みにじられてゐた一本に、私は泣いてゐます。決して悲しい涙ではありません、悦び感謝の極みであります。この一本の小草こそ、癩者穂波の救はる復活の見本であるからであります、何と言ふ醜い踏み切られた屍の中から、若々しい生命の復活の姿であらふか！！／●私は甚だ『にくまれぐち』を出すやうに成つた。然し、私自身は、一人でも多くの方に好かれ、誉められ度い心で一杯です。然し、何か他から私に迫つて言はしめられるのです。／●つらひ編輯の任を止さうかと何度思つたか知れない、靈交会の経済の心配まで荷が重すぎて苦しい、然し、本誌を止したとて、止さして呉れぬ方がある。噫、主キリストは私に迫り給ひて止まない、主キリストが御止しになる迄は止せないのでせう……。／●どうやら四月号も生れました。皆様の御愛撫を願ひます。祖国に目下大濤の底にゆれつゞ、前進してゐます、会友各位の御精進を徹して、神の御栄光の顕れますやう……………」

***「報告欄」『靈交』第234号、1938年5月10日**

「一、金式円也、愛媛、平尾権之助様／一、金壺円也、大阪、辻政子様／一、金式円也、島根、松原伸青様／一、金壺円也、広島、中上悟様／右、厚く御礼申上ます。」

*** 「編輯後記」 同前**

「▲鯉幟こゝにも日本男子あり……五月と言ふと、何となく勇ましい感じがする。／島の人達も病者ながら軽いものに衣更して、青葉の下を活歩して居る。春が女性なら、夏は男性であるやうな感がある。汝ら雄々しかれ、我すでに世に勝てりとの聖声も初夏にひびいたのでなからふか……。／○今日となり、菊つくらうと思ひけり、これは及ばぬ悔ひであるが、そんな事のないやうにと今から菊苗を育てゝみます。一日一日、一葉一葉に中々苦勞がありますが、前途に向つて伸びる努力、伸る生命、丁度、復活への信仰のやうに、苦勞の内に勝利の喜悦が味へるのであります。／○島の名物のツツジの花が、山の地肌が紅く見えてゐます。開所する迄は、ワザワザ船で遠くより見物に来る人が尠くなかつたとの話であります、人数が多くなつたので、何時とも無く荒れて来ました。然し、現在にても、昔時の全盛時代の面影が残つてゐます。／○救はれた病友の証言を書けとの御言葉もありますが、何回も何回も繰返すと余り面白くありませんので……然し、今後は種々なる実例として、昇天者を第一として、現存者の救はれし証言を記し度いと存じます／○天沼兄が未だ重床室に静養中で、聖書研究の欄が作れません。その代用として、穂波一流の野武士式のもの的一篇づゝ加えます。今月は「神は我が牧者なり」であります。私の髓に徹した処だけ、学問的には全く落第論文であります。／○こんな小雑誌でも、毎月つゞけて記す事は余程の祈りの結果でありまして、笑つて済せる程に簡単には参りません。春は脳が病めますし、痔も悪いし、体のもりでも仲々ですが。病氣は病氣に任せて、私は私で前進すると宣言してやりました。決して心配ない体と霊とは、ソレゾレよくやつてゐます。／○わがグループは十五年、二十年と長生してゐる者が多いので、肉体が病闘につかれて重病室に静養する者が十四、五人は絶えなくなつた。いよいよ神さまと首引きの生涯に入つたのだが、悪くするとサタンに為てやられさうでいけない、ガンバレ！／○敗将〇〇〇が長期抗日を唱して居るとの事、彼れにも困つたものだ、支那を救ふのは、早く劍を捨て、和を計るより外はないと思ふが、或は自棄くそかな……然し、能く考えて見ると、日本こ

そ真に長期赤減と大陸政策上より長期努力と、種々な犠牲を払ふ覚悟が必要である。真の平和の光りとなるには、犠牲の精神とエホバへの深い祈りとが更に大切であると思ふが、何うでせうか！」

*** 「報告欄」『靈交』第 235 号、1938 年 6 月 10 日**

「一、金壹円也、広島、中上悟様／一、金壹円也、岡山、南小次郎様／一、金壹円也、岡山、後藤茂一様／一、金壹円也、岡山、林麟三様／一、金六拾錢也、岡山、守安義夫様／一、金六拾錢也、岡山、毛利正吉様／一、金六拾錢也、岡山、青井晴光様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金壹円也、北海道、杉村元四郎様／一、金壹円也、当所官舎、奥村竹一様／以上／右、有難く受納仕りました。」

*** 「編輯後記」 同前**

「▲急稿で相済ぬが、自治会の予算審議やら、山本君の昇天やらで、次ぎから次ぎへと押寄せて来るので、自然と急ぐやうに成るのである、まあ皆さんに我慢して頂き、今月号はこれで擱筆する事にする。／▲詩の二十六篇は研究兼用の伝道文と思ひ、「はたらけ」は四、五の応答を一丸にしたもの、是は一つ団体上の実際として、修養団の同志などにも考えて貰ふ事と致したい。未だ記し度いものがあるが、大略に止めた。／▲夏は何と言つても、清がしくて勇しくてよいなア……我輩は夏を愛する、第一はだかで事足りるのが何より嬉しい。不自由な身体と幼児と同様、手足に物の巻き着くのは、束縛を感じて致し方がない。／▲私は「茶」を好む、茶を飲むのが唯一のドウラクである。一斤金貳円也の茶を一年に四斤余り飲む、麦茶をガブガブと鶉の如く飲む。それが楽しい、それで嬉しい、その勢でウンと書く、又読むのである。／▲近視眼になりかけたやうだ、十間はなれると人の顔が湯気の中に在るやうで、目鼻立がハツキリと判じ難い、病床三十余年となると、潮の満ち来る如くに何時頃よりともなく、足から手から顔から脳から耳から目から痔までに及んで来た、完全な処は一つも無くなつた。面白いものだと思ふ。／▲心は大平安であり、青葉の山の如く生命はそよいで歌声をひゞかせてゐる。五月晴れの空の太陽の如くに、希望に輝いて祈つてゐる。私は確に天下の大幸福者に相違ない、涙の底の勝利を味ふてゐる。／▲此間も若い人と精神科学について語り合つた、「人間の磁力論」から「種の飛來說」から

「電子説」から「催眠術」、はては「夢」から「預感」など迄いつて面白かつた、其結果は、「人間は肉体を離れて生き得る」ことを思はざるを得なくなつた。／▲人間の「余裕」と言ふ事を又、山本君の臨終で考えさゝれた。人間は真に大事の瀬戸に立つたならば、自分にも他人にも何らの力はない、全く無能だと言ふ事である。自分にも他人にも、何の余裕を持たないのだと言ふ事である。不平や不満やの有る内、喧嘩の出来る内、泣ける内は未だ余裕があつて、真の切迫でないと言ふ事を……。／▲人の根も精も業も尽きた処より神は働くと言ふのは、深くも実際の言と思つた、祈りの尊さは、此の窮極の力として体験する。戦場の兵隊さん等は是れであるまいか、然し、人間は祈の窮極に立つて始めて、何ものにも乱されず、恐れず、ウバワレざる平安さが味へるものである……。／▲自分の祈りは、追々と現世を離れて雲雀の如く永遠の世界へ近附いて行くやうに思はれて来た。人にも会にも物にも、心が引かれなくなつた。考えて見ると矢張り、「ハリアイ」とは欲する処にあるのだ。自分は地上に何の張合も無くなりかけた……。然し、天に向ふと心臓は躍つて来る。／▲空間に翻る鯉に自分の心姿を觀る神の世界に生きる、何と言ふ張合のある人生であらふ。わたしは矢張幸福者である。／▲各位の御幸福を祈り上げます。(終)」

会計係「報告欄」『靈交』第236号、1938年7月10日

「一、金壱円也、広島、中上悟様／一、金貳円也、兵庫、名和金次郎様／一、金壱円也、八幡、横田貞治様／一、金參円也、和歌山、木戸口栄三郎様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金壱円貳拾錢、平塚、高橋住子様／右、誌代及寄附として有難く頂きました、厚く御礼申上ます。(会計係)」

*「編輯後記」同前

「○六月号は印刷落字の爲め、骨折つて醜くなつてイササカ腹が立つやら、読者に対する責任感やらで、久し振りに石頭を悩ましました。幸ひ自治会とその作業部の御蔭で、今号より所内にて、印刷の御世話に成る事となりました、相変りなく御愛顧下さいませ。／○名和先生の御来教は有難かつた、打越兄の導師であり、師弟の悦び、側目にも嬉しいものでした。又、伊藤恭治先生の御来教は、是又感謝でありました。／○山本兄と山形兄とが永眠した、会の同志は大方が弱くなつて、次ぎ次ぎに重病室に臥すので……。昇天の準備…

…を強く思ひめぐらされる。死などは大した問題でないが、死線の彼方、永遠の生活は実に大問題である。／○詩篇十九の一文は「現代人」への贈物と致したいのであります。取るか捨るかは御勝手に任す外ありませんが、神が送れとの命令に従って記送いたします。／○葬送記事は……霊交会葬の横顔……を御知らせ致します。司会も他の役割も、其時々々に相談の上で故人に親しき教友が多く当ります。教話は毎度び穂波が立たされます。約一時間で閉会します。それから火葬場に行き、十分間位いの式をして散会しますが、毎度三百人以上の会葬者があります。／○蚤が出る蚊が出る来たか血兄弟……夏の名物である是らが出なかつたら、夏も淋しいであらふ等と考えてみると、夜半まで眠れないで神経痛まで引出して終つた。蚤や蚊は別としても、汗が無くては夏の味がなくなるであらふと思ふ。涼風の何のと言ふても、汗によつて味が出るのだから……。／○ジャガ芋とトマトが出る、西瓜と梨瓜とが登場する。水々しい果物が出る、汗の夏に対して、何と言ふ有難い天賦の賜であらふ、これが寒中に登場して、西瓜の煮たの等を喰はねばならぬと為ると珍妙なものだ。／○鉢植をイヂリつゝ、無駄のないのに驚いてゐます。我らが造花一輪しても捨る切端が必ず出来るのに、千輪の花を咲かして不足も余分もなく、材料を丁度に使ふ……草の生命に……頭が下ります。神のなさる事は、実に空莫なやうで確かなものですね！／○さあ七月号も是で生れた。初版以来、二百三十六号と成りました。皆神の御恩寵であり、又会友各位の御愛であります。／○この誌が御手下に届く頃は暑くなりませう、或は其頃に大朝の浜田先生御配慮下さつた穂波選集が出版になるかと存じます。是は癩根絶の為に献げたい祈の原稿です、何卒御愛禱と御利用を御願ひ申上ます。／○大島の印刷所の御世話を頂くやうに成りましたので、編輯子ものんびりして居ります、「一枚半程、記事が不足ですよ」と知らして下さる、「よろしい、早速かきます、御願ひします」と言ふ訳で……この誌が御手下……云々から記してゐます。／○何とか言ひながら後、四号即ち十一月号で満二十ヶ年の間、編輯に従事して来ました……全部感謝のみ……であります。幸ひにして、其間は身体も守られて、只の一月も休む事なく奉仕させて頂けたと言ふことであります／これは私の墓でありまして、又、私自身の赤裸な屍そのものでせう！。／○窓外は銀糸の如き五月雨が、松の青をぬうて降り注いでゐます。鉢のアマリリスの葉が重さうに

微風にゆれて、二、三日前に萌えた若芽が親を仰ぐやうな形で伸びつゝあります。白百合の花は盛りを過ぎて、アオイの一輪、二輪が真紅に燃えています。この雨をさかいにドツト暑くなりませう。／○長の病窓とて、毎年すこしづゝ気力がをとろへて参りますが、夏となると体のチョウシが良くなつて呉ますので、忍びよくあります。デワこれで擱筆します。／愛読者各位の御健康と御精進を祈りて止みません。」

会計係「報告欄」『靈交』第237号、1938年8月10日

「一、金貳円也、愛媛、棟田重次郎様／一、金参拾銭也、愛媛、宮内信寿様／一、金拾銭也、佐世保、中島スエ様／一、金六拾銭也、東京、安部幸毅様／一、金拾円也、高知、弘田里子様／一、金貳円也、京都、伊賀貞子様／一、金六拾銭也、東京、大森医科大学 青年会様／一、金壹円五拾銭也、広島、中上悟様／一、金壹円也、高松、ガーデーナー様／一、金壹円也、豊中、聖光会様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金壹円也、愛媛、橋新様／一、金貳円也、京都、内本善三様／一、金六拾銭也、東京、田沢康三郎様／一、金六拾銭也、鳥取、遠藤泰子様／一、金六拾銭也、青森、田沢虎雄様／一、金拾五銭也、佐世保、中島政太郎様／一、金参円也、カナダ、鵬本正信様／一、金六拾銭也、広島、平山千代子様／右、誌代及御寄附として有難く受納仕りました。／会計係」

* 「編輯後記」 同前

「◎編輯に着手した日に、表日本全地に互^互る大雨水害が伝へられた。思はず肌に粟を生じ、言はれない恐怖にフルヘルのであつた。日本よ、悔ひて祈れ、今こそ神に帰りて、義しく真面目に、立ち直つて祈らねばならぬ時である。／◎汝ら、シロアムの城に圧死した人が罪人ではない、悔改めねば皆ほろびる。大きな罪を小数の者に負はしめらるゝ事もあり。悪者の罪を善人に負はしめらるゝ事もある。神の深い愛の鞭は、意味深く打ちをろさるゝ！／◎空を仰いで==御見舞を衷心の涙を以つて御送り致します==特にキリストに在る方にして、受難されし兄姉の上を思ふて「尊き十字架」に追ひ上げられし事としか考へられません。主のなさり相な御はからひです！／◎もし斯る私の思ひが間違ひでないと致しますならば、キリスト信者の有る限り、日本は滅ぼされないと確信致し得るのであります。／◎ひたぶるに十年あまり学びたる聖書のことば我を活かせり／死の谷の蔭を歩むにさも

似たる此生活も喜びのあり／咽喉やみて声のいでねば唾のごと首でもの言ふくせの附きたり／◎右は神田兄の遺詠である、彼が病床の彼のミヂメさを偲びては、今更ならねども、神の救ひの偉大なる生命の恩寵を新しく感謝し、讚美せざるを得ないのである。聖言は活きて、且つ力ありである＝ハレルヤ／◎今日は七月九日、朝の七時に光明園病友五十余名が帰られた。大阪外島が高潮に押流されて大島に七十人迎へてより、早や足掛五年になる。迎へる時は半年程と言ふ事であつたが、人生のあるものを感じさゝるゝ＝。／◎小雨に煙れる瀬戸の島々をぬひ行く船に旗振りつゝ別れを惜む者も、渚に立つて涙で見送る者も、人こそ知らね神の摂理の下に、流るゝ月日の海を航してゐるのである。誰が明日の運命を知らふ、只神のみ知り給ふ。／◎祈りの人、潔めわかたれし者、斯く思はるゝ教友は、続々と召されて昇天する、暗い人世はいよいよ暗い感がする。重床の友も又、祈り深き人が多い、此処にも我らの罪が比較的健かな者の罪のふたんが思はさるゝ！」

会計係「報告欄」『靈交』第238号、1938年9月10日

「一、金参円也、東京、後藤安太郎様／一、金五円也、近江八幡、日基教会エスエス様／一、金壹円也、広島、中上悟様／一、金拾五円也、倉敷、林源十郎様／一、金貳円也、京都、平沢恭子様／一、金六十銭也、天塩、石井六蔵様／一、金壹円也、都城、末永三喜太様／一、金壹円也、静岡、奥座克巳様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金六十銭也、若松、小林マスエ様／右、誌代及御寄附として有難く頂きました——尚、七月号の本欄に於ける間違ひを訂正いたします。広島の中上悟様の金額、七月号に金壹円也とありましたのは、金壹円参拾銭也でありましたから——誤記失礼いたしました。(会計係)／附記／この際、一寸、靈交会事務に付きまして申上げて置き度いと存じます。中には靈交会と穂波とを同一に御取扱ひにならるゝ方もありますが、斯る混同はハツキリ区別して頂き度いと存じます。靈交会と穂波個人とは別でありますから。会の事務は分タンして居りまして、穂波は本誌の編輯方面と聖書研究など受持つてみますが＝会計は三宅老兄と石本兄とが当られ、其の他の事務も多くはこの両兄が御苦勞奉仕下さつて居ります。図書係は林兄、献金係は高本兄と云ふやうに記録係、何々係と云ふやうに別れて居りますので、御参考までに申上げて置きます。穂波の靈交会とか、穂波を以て靈交会の牧師のやうに御

間違ひ下さらぬやう御願ひ申し上げます。元より各方面を助太刀は致して居りますが＝＝。
靈交誌も個人のものでなく、会の事業の一つでございます。(穂波生)」

*** 「編輯後記」 同前**

「■今年の夏は誠に涼しかった、これでは稲田の出来ばえが案じられると云ふ程であつた。こんな処に居ても根が田の中で蛙と共に生れた故か、お百性の事や、町の事がよく心配になつて困る、苦勞性なうまれかも知れない。／■今度大朝の浜田先生の御骨折で出版になる拙著は……。／九月中旬出版予定／定価金壱円也／右の如くなるとの事であります。癩根絶のため、御活用をねがひます。／■朝顔の垣が寂れて、キケヤウの花がウスムラサキに、つゝましく香つてゐます。窓に置いたるアマリ、スの雄大な葉の下に、又新しく芽葉が萌えて出た、アスパラカスの神経質なのは涼味よりも痛々しい感じがする……。／■今夏は涼し過ぎて、体の都合が面白くない、大方はねころんで暮した。／どうも暑い方が身体のコンディションがよろしいとは、我ながら不思議である／印度人の子ではなし、純日本人の種であるが、イササカ変態か知らむ。／■エリクソン夫人の訳詩『燃ゆる心』を頂いた、米国の病友に幸あれと祈るや切である。先年も編輯子の詩の一篇を送れ、然らば印度の病友二十五人が助かるから、との手紙で米国へ詩を送つた処、よろこばれたが、神よ病友のために更に用ひ給へと祈つて止まぬ、自分ながら不思議な活かされだ！／■黙つて臥て祈つて居ると、不思議な処の未知の人より、祈りと涙とを以てハゲマシテ下さる、用ひて下さる、今度の出版も意外な恵まれで、自分は『神のなさる業である』としか思はれないのである。神は色々な人を通して、用ひ活かして下さる。汝、われを選ばず、我れ汝を選びたり。この聖言をば体験するものである。キリストの神は現も生きて、偕に在し給ふなり……。／■一日も早く、東亜の平和を念じて止まない、今度の流血の惨は深刻である、黄色人種が血で血を洗ふて居るのである……人間と云ふものは、自然との闘ひだけでも一通りではない、それを人間同志が戦はねばならぬのか……これこそ、無神無靈魂思想に毒された証拠である、赤色病こそ全人類の敵である。／■癩根絶を願ふ者は『我らが最後の癩者』とならねば又、我らこそ最後の苦杯のオリ返もなめる覚悟が必要である、斯る自覚と理想で死にもの狂で突かかつて行かねば、目的は成就せない、来年を待つ者は千

年たつとも目的は成就せないであらふ……我は夢を追ひて倒るゝとも、進むのみである。
 /■病者が外部の同情にハゲマサるる事は何程か知れません……私は斯の体験よりして、
 病者の願力は外部の運動に対して何程かの力となる……であらふ事を思はざるを得ないの
 である。ものの成就には内外照合と云ふ事が大切！/■同じ癩に悩むなら、出来る限り大
 きく広く悩むべきでないか……でない、他人も自分も何時までたつても救はれないぞ…
 …愚痴は止して、全世界の癩に対して共に宣戦布告やらうでないか、神は我らの味方であ
 る。/■利己の心を悔改めよ……一人なやむ者は、自分の救はれだけしか考へないものだ
 ……新生を得よ、全人類の癩悩を病む生命者たれ、それにはキリストの生命を頂かねばな
 らぬ、これこそ癩者へ説く生命の福音である。/■我らが諦めや、悟りの福音や、其場か
 ぎりの慰めが何になる。斯るものは有つても無くても、結局は腐るのだ、我らの救ひは、
 戦ひ取らねばならぬ、永遠の生命の威力をもつ者と新しくせられねばならぬ、此外に救ひ
 なし。/■大人振つた言のみ記して終つた、恥しい事である。/各位の御幸福を祈りつゝ、
 擱筆いたします。又十月に……サヤウナラ/■岸野月兎兄よりの歌稿は、十月号へ割愛い
 たしました、悪からず。十一月は創版記念号です。歌稿俳稿等を少し早目に届けて下さい。」

会計係「報告欄」『靈交』第239号、1938年10月10日

「一、金貳円也、京都、伊賀貞子様/一、金壹円也、高松、玉井友次郎様/一、金壹円也、
 高知、大坪虎意様/一、金貳円也、堺市、井上英雄様/一、金六拾錢也、和歌山、西林弘
 様/一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様/一、金六拾錢也、滋賀、谷口源蔵様/右、誌代
 及御寄附として有難く頂きました、厚く御礼申し上げます。会計係」

*「編輯後記」同前

「○諸方の夏期修養会の祝福された報告の記事を読むで居ると、『御名の崇められ』ること
 に秋の喜びを一入に感じて居ります。平常の生活を単純化して、斯る靈会に成る可く出席
 するやうにあり度いものと存じられます。永遠の生命のために経済を利用する事は、鉛を
 もつて宝石を買ふやうなものでありませう。修養会に出席なし得た人を羨しく思はれて居
 ます。/○四国もつひに暴風雨にやられました、嵐の中に音して折れ飛ぶ松の枝を見てハ
 ラハラしました。幸ひ大した被害がなくて済みました。/青年団や戦友会の人々が嵐を突

いて活躍する……愛島守護の精神奉仕……有難いことです。この活動に信頼して、重床の人も安心して臥て居る事が出来るのであります。自治の美は、斯くした方面に伸びて行くのであります。／○雲の峰が完全に崩れて、平たくしてオチツキのない空を仰ぐやうになつた、秋の空のよいのは、晴れ切つた陽と夕映へ燃ゆる頃とである。／海の色もあはたゞしい、秋の海のよいのは、月明の夜面と、鳥啼き渡る暁の色と、銀鱗をどる上げ潮の流れとである。／○大阪毎日新聞の徒歩旅行家の森さんが訪問されて……旅行談……を一般に語られた。旅行不可能な我らは、九州よりカバフト迄の苦心なり、又、各地風俗生活程度、地理的気候や動植物の事などは嬉しくもあり、教へらるゝ点が尠くないのであつた。斯る談話は、或る種の講演や説教より益せらるる処、決してすくなくないやうに思はれた。深く視ると、人世には神が生きてゐます。／○修養団の万代先生の乃木將軍を語られしは、甚だ有難かつた。特に死にまさる生存には、大義の前に立つ人間乃木の生涯に思はず涙を催した。／人間が大義の前に生きる時、そこに尊い十字架の人生が如実になる。神の大義に生きぬく事は、確に人間最高の生命、即ち永遠の生命である。／○別掲の如く、光友社の拙著が極小部数出て来たとの事であり、御希望の方は至急に求められたい。代金壹円八拾錢也。英訳されしは『みそらの花』の一部で、米国 MTL の注文で立派な製本です、非売品であります。／○人間の歴史は、創世記より今日の日記帳に至る迄が、その善とし、その悪とする、善悪いづれとも『血の痛み』であると観じられたのであります。／涙も笑ひも自分の血の中に視るとき、人間社会の底に流るる深刻なる連帯責任を感じざるを得ない。一人によりて罪は入り、一人によりて救ひの入り来た意味が、血の真理として迫つて来るのであります。／○本誌及拙著に対して、諸方より感謝の御手紙をホトンド毎月頂いて居ります。大変にはげまされて居ります。今夏の如く涼しいと身体のチョウシが悪くて、休ペンを何度び考へたか知れませんが……こんなに喜んで下さる……のにと思ふと、又力が湧いて来て立ち上るのであります。／○来月は記念すべき号であります。三ヶ年続けば小冊子として短命でない、との定評があります。大方は三ヶ月から六ヶ月が多くて、一ヶ年からは長命の方で五ヶ年の継続は極小数と言はれます。霊交は最初毛筆にて八部出版より現在の一ヶ部迄、つひに式百四十号を重ね、満二十ヶ年となりました。／○

長続きが必しも益ありと言へないのであります。然し片面には、無益なるは長続きせず、とも言へるのであります。善き点は神の御働き、欠点は自分の働きであります。残更に謙遜するものではありませんが、罪人なる自分が神の栄光の御働きに伴ひ下さった恩恵に感泣するのであります。／○聖書一冊の人と言ふのを聞きまして自分も、聖書一冊の人に成りたいと所持する書物を調べて見ました。沢山ありますが、結局は聖書一冊の外に出て居ない。それに新聞も雑誌も、一切の解説が聖書一冊に出でない事が解かつたので、自分も矢張り聖書一冊の人であると言ふ事になりました。／各位の御清福を祈りつゝ、擱筆いたします……。サヨウナラ！」

会計係「報告欄」『靈交』第240号、1938年11月10日

「一、金壹円也、広島、中上悟様／一、金五拾錢也、盛岡、三浦信一様／右、誌代として受納いたしました。会計係」

*「編輯後記」同前

「満二十年余の総決算表が本号である、十年一日の如くと言ふが、神の福音は昔も今も変りがない、物はかわり、世は移り行く中に立ちて、**キリスト**の十字架の救ひのみは光り輝いて在し給ふ。記しきれない奇蹟であり、感銘である！／伏見の井川清様より「光に明け行く」と題する御次女の遺稿集を頂いた、感共する個処あまりに多く、他人のものと思へない程であつた。また原田嘉悦兄の「天路は拓く」を拝見した、これも大いに啓発して頂いた。／パルトのロマ書は、矢張りパルトの神学である、是は神に対する信仰の普通のことでないか、学者には成り度くないものだ、こんなにむつかしく言はねば不可なのかなア。こんなに思へてならない……然し、三読しやうと思ふ。／涼しいと感じる間もなく、「寒むさ」を言ふやうになつた。愛する夏は今いづこぞ。今日は島の青年団主催の運動会がある筈、ペンを投げて、見物に出かけるとしやう。各県対抗リレーは毎回の呼びものであるが……。／靈交誌に対して期待して下さる方があるのは、私のペンを何程力づけらるゝか知れません。昭和十三年のみにても、たくさんの礼状を受取りました。又、修養団より出版した「光れ輝け」に対する礼状は全国より頂いた……。／庭前に植えた一株の菊が丸形によく出来て、沢山の蕾が附いた／百合の根を五球植えて見たら芽が出て来た、強い生

命だ。／薔薇の一重に近い花の咲くのが一鉢ほしいやうな気がする。／足の傷のために年中なやまさるゝ、私にとりて大なる「刺」である、幾度か祈つたが治らない……神の鞭……であらふ。この為、研究会は閉されてゐるのが心苦しい、しかし神に打たるゝことは我が益であります。／鞭こそ愛の悶えの火花である、斯く迄に神は愛し給ふか！この罪の子をいかなれば悶ひ給ふ程に愛し給ふのでせうか！／これは地上には有り得ないことである、神の愛の奇蹟である……。／靖国神社の臨時大祭に一分間の黙禱、将兵の労苦の結果の死を思ふと涙が催ふされた、この犠牲！この遺族！感慨無量である……。／支那の良民こそ、気の毒の極み、一日も早く「平和来」を祈るや切！／二十五年の間には、雨もあつた、風もあつた、しかし神によりて受くる時、凡て善からざるはなし、恵みに恵まれし靈交会であつた……感謝々々！／祈つて来たが、暗い療養所も大いに明るくなつた、全く時代が異なつた。／新時代の療養所は、指導方針も新にせねばならぬ。救癩事業と言ふ内容が「病者本意か予防本意か」、この両方を兼ねるとしても、伝染病としては根本を予防本意とせざばなるまい。此処に療養所に対して認識の相違が生ずる。／認識の相違は、事業方針及経営の上に大なる影響を生ずる。殊に、病者の精神的自覚の上に「死と活」との相違となる……自分のためか、国家のためか……救療事業か、予防事業か……此処に療養所の岐路がある、指導方針の岐路がある／各位の御清福を祈りつゝ、擱筆。」

会計係「報告欄」『靈交』第241号、1938年12月10日

「一、金壹円也、神戸、聖書教会様、一、金参円也、大阪、西田五郎様／一、金壹円也、広島、中上悟様、一、金参円也、愛媛、谷泰吉様／一、金参円也、神戸、福井春枝様、一、金貳円也、東京、牛丸総五郎様／一、金壹円也、香川、植村徳太郎様、一、金貳円八拾銭也、神戸、勝原梧鳳様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様、一、金貳円也、東京、西村勝美様／右、誌代及寄附として有難く頂きました。会計係」

*「編輯後記」同前

「○裁縫の出来ぬ愚かな女を訓すために、冬より先に「手づつをどろかし」と言ふ——寒さ——が神様より来るものだ。この寒さは、冬が近く迄きたが薪や、炭や、綿衣や、冬仕度が出来たか、未だなら早く用意せよ、と神様の御声だよ——天道さまは人を殺されない

——と母から教へられました昔時をなつかしみつゝ、早來の寒波の中でペンを運びつゝあります。／○窓外一坪の花畑に植えた菊が、一ケ年の丹精にて立派に咲きました、一本の花三千余輪、高さ一尺余、周囲一丈余、花畑の半ば以上に堂々と香つてゐます。他の一本は暴風に害せられて、丁度その半分程の大きさに咲いてゐます。去年の冬に芽分して、茶のデガラと十匁目ほどの紅茶を煎じた液とで作りました。手数のかゝる間が楽しみで、花となると他の人々が楽しみて居ります。／○菊の満開の五、六日と言ふものは、窓を開くとプンと香り、月の夜の姿は特によろしく、夜中に時々ソーツと起きて覗きました——何だか天の使ひ達が花の上に降り立ちさうに思へますので——子供らしいとお笑ひかも知れませんが、本当に私は、そんなに思へましたから、目が自然に醒めるのであります。然し、天使は羽を休めなかつたが、見る程の人の心が美しい時となりました。／○清悦——と言ふ事は、東洋人の満足する處で、ガーガー騒ぐのは何となくピッタリと致しません。何かの奉祝にしても、式場で群衆的に祝賀したより後で、家庭的に「おいはひ」する方により、衷心より満足した奉祝気分にはたるのであります。クリスマスの奉祝も「清悦」にひとりたいと存じます。／子に送る心ばかりの用意して赤飯たべて歌ふこのよる／○皆さんがおまんじゅう一包づつ貰つて子供らは、お人形もらつて、お話して、歌うて式を終つた後で、四、五人集つて感謝の祈して別れた、彼の素朴な二十年むかしの、大島のクリスマスがなつかしい。靈交会員は増加し、迫害のない今頃の祝式は、日曜学校生徒を中心に催すが、会員全体に彼の時のやうな純朴さがないやうで、何となく淋しい感じがする。／○儀式ばつた事は止して、七、八人づつが坐つて渋茶でもスヽリ合ひながら、キリストさまの事を語り合ふなら、何程祝悦に充さるゝか知れないやうに思はれてならない、形式より心の奉祝こそ、日本人の欲するところであるまいか。出来得るならば、親しい人や知人、隣人達を招いて家庭清祝を守るならば、奉祝に充たされながら、こゝろよりこゝろへの伝道にもなりて、真に日本的であると思ふ！／○我国の神祭には、家庭へお客を招きて共に飲み食ひし、さて神社に式典の初まる頃に主客打ち揃つて参詣するのであります。クリスマスも斯る風に行ふべきであるまいか——先日も靈交誌二十周年のいはひをして、私を主賓にして下さつたが「君は儀しきばることを好まれないから」とウチワに済して下さつた

のは嬉しかった、兄姉ら水入らずで、こゝろとこゝろとピッタリして涙ぐましく！」

【附記】本連載はこれまで、『彦根論叢』『滋賀大学経済学部研究年報』誌上に稿を寄せてきた。大学が発行する紀要に研究のための資料を載せることに意義があると考えたからにほかならない。連載第7回の原稿を『滋賀大学経済学部研究年報』第17巻（2011年11月発行。原稿締切同年8月末）に寄せたとき、たまたまほかの研究ノートと研究動向の原稿と重なってしまった。同年報第17巻にわたしは、それぞれ稿の種類異なる、研究ノート、研究動向、資料紹介の3編の原稿を投稿することとなったのだ。

それに対して同誌編集委員会委員長からつぎのとおり伝えられた。3編の投稿に対して編集委員の多くからイメージのうえでどうかといった意見がだされた。掲載誌を『彦根論叢』退職記念号にかえてはどうか。

これに対して、①『彦根論叢』と『滋賀大学経済学部研究年報』とでは紙幅が異なること（前者20000字、後者40000字）、投稿する研究ノートは40000字近くになること、②『彦根論叢』退職記念号には論文と研究ノートとしか掲載できないこと、分割した稿を掲載出来ないことを伝えた。

それに対して、①研究動向を論文として掲載するばあいもあること、②字数が多くなってもかまわないこと、との返答があった。

これに対して、①わたしの執筆する研究動向は論文ではないこと、②規定枚数の倍近く原稿を認め、それを掲載することはおかしいということ、を伝え、これ以上の議論をやめた。

『滋賀大学経済学部研究年報』執筆要領にも国立大学法人滋賀大学経済学部研究年報規程にも、今回のわたしの投稿を拒絶する項はない。また、『彦根論叢』執筆要領も同様で、ただし、『彦根論叢』執筆申し合わせには、「同じ号に、2本以上の論文（但し、書評等を除く）を執筆することはできない」（1988年10月23日編集委員会）とある。だがわたしは、「2本以上の論文」を投稿しようとしたのではない。

1つの巻号に、稿の種類が異なるとしても3編以上は投稿できない、としたいのであれ

ば、手続きを経て申し合わせ事項として決めればよい。編集委員会でそれが議論されたことを聞かないし、いまだに教授会にも議案として提示されていない。

わたしは、本連載の発表媒体をかえることとした。当初の予定では、本連載第8回を『彦根論叢』第388号(2011年夏号、6月30日発行)に寄稿するはずだったが、それをやめ、滋賀大学経済学部 Working Paper Series の1つとして公表することとした。(2011年7月6日記)